

ふるさと交友録

～伊藤 公平～ 18

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月1回のペースで公平さんの“大切なひとびと”を紹介していただきます。



伊藤公平(いとう・こうへい)北見市在住、郷土史研究者。私設図書館「麦の風文庫」と「野草苑があでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさと・そぞろ歩る記」を連載。道新「ときわぎ」執筆者の一人。

小さな友達、中華料理店・楽天華の店内に放し飼いされている柚貴君の九月の運動会のことを書くのでオサムんちの話は休み。

二年程前、「みんなで跳んだ」という小さな

でも一回でも多く跳ぼうと練習した。奇跡は起きた。結果は予想通りのピリッカスだったが七〇余回も跳んだ。矢部ちゃんはニコニコ跳んだ。みんなは泣き笑いして跳んだ。

い記事が新聞にのり、TVで放映され、本にもなった。ある中学校の運動会の種目の一つに学級対抗の大縄跳びがあった。二年一組だったか。練習を始めたが男の子・矢部ちゃんに加わるとどうしてもうまくいかない。矢部ちゃんがいけないと何十回でも跳べる。そうすれば優勝できるかもしれない。大会前日の放課後、クラスで話し合った。矢部ちゃんぬきで跳ぼう。大勢がそう傾きかけた時、女の子・金沢さんが言った。矢部ちゃんぬきで

柚貴君の運動会の日、年長組の子が縄跳びしながら入場して開会宣言をした。名前を呼ばれて何人目か足の不自由な子がいた。その女の子は縄をうまく回せなかったが、臆するところなく縄を回して二歩前へ進み、又縄を回してさらに二歩前へと進んだ。失敗しても落ちついてやり直した。

は跳びたくない。クラス会は大もめとなったが金沢さんは譲らない。矢部ちゃんどうすると聞いたら跳びたいと言う。議論が行ったり来りしたが、やがてポツポツと賛成の声があがり、ついに勝ち負けも大事だが、今はクラスが一つになれるかどうか、それが大事だ、ドンケツでもいい、みんなで跳ぼうとなった。

先生が近づいて何か声をかけたようだったが手は貸さない。女の子も何事もなかったように丁寧に縄を回して前へ進んだ。後ろからの子に追いぬかれても、女の子はそれまでと同じに縄を回して一歩前へと進んだ。手を貸さない先生も、それに頼らない女の子も、「がんばれ！」と心で拳を握りしめて応援する親御さんも、みんな強くて立派である。私も「みんなで跳んだ」を思い出しながら「がんばれ！」と応援した。涙があふれた。

夜半の雨も上がって当日は快晴。競技の合間をぬつての練習もうまくいかない。それ

ことだぞ。